茗溪学園中学校高等学校

Study Skills を身につけさせる教育　その 19
夢の実現：星出宇宙飛行士

教務部長　田代　淳一

今年 6 月 1 日、ついに元茗溪生が宇宙に飛び立ちました。

このシリーズ「その 15　宇宙に一番近い学校」で紹介した茗溪出身の宇宙飛行士、星出彰彦氏が宇宙ステーションでの役割を果たしてディスカバリーで無事帰還しました。

星出氏の少年時代の夢は「将来、宇宙にいくこと」。茗溪学園に寮生として入学したのも、科学都市つくばに新しくできた寮制私立学校（星出氏は 6 回生、創立 3 年めに入学しました）で当時の宇宙開発事業団筑波宇宙センターに近く、“科学の風”に触れられることが理由のひとつでした。

もともと明るく活発な星出君は、寮生活で集団生活に必要な規律と Social Skills を学び（当時の茗溪の寮はかなり集団主義教育に力を注いでいました。現在は随分と個人の部分を認めています。）、茗溪で Study Skills とどんなことにも挑戦する勇気を身につけて、夢を大事に育み続けます。彼が高校 2 年の個人課題研究で選んだテーマが『宇宙ステーションについて』。彼の研究計画カードの研究目的には「スペースシャトルの知識を取り入れ、航空力学・航空宇宙学の両面からその形態の由来と将来、そして理想的な形態を考える。また、時間があれば材料・エンジン（推進機）についても考えたい。」、研究方法には「主に図書館の文献資料から、飛行機とロケットの違い、スペースシャトルの歴史・形態について、航空力学・航空宇宙学の知識などを取り入れる。また、筑波宇宙センターも利用したい。」と書かれています。

茗溪出身の宇宙飛行士、星出彰彦氏

実は星出君は夢の実現のために更に有効なプロセスを描きます。創立時から茗溪学園は United World College（UWC）への留学を積極的に応援し、経団連からの奨学金を得て留学する制度に合格するためのサポート態勢を続けていますが、星出君はこの制度を利用し、海外に留学して国際性と英語力を磨く道を選択します。選抜試験にも合格し、彼が留学先として選んだのが UWC シンガポール校。高校 2 年の 9 月からの留学のため、彼の個人課題研究は未完成のままですが、実現のための確実なステップを刻んでいました。

帰国後進学先として選んだのが慶応義塾大学理工学部。ここで流体熱力学を身につけて、就職先は当然、宇宙開発事業団（NASDA、現 JAXA）。本当に脇目も振らずに“宇宙”まっしぐらです。NASDA で実務を担当しながら宇宙飛行士試験に挑戦しますが、2 回連続で不合格になります。が、多少の困難など気にしない茗溪魂。不合格になりながらも、その英語力とコミュニケーション力（Social Skills）、技術力は評価されていてついに 3 回目にして合格。念願の宇宙飛行士に採用されたのでした。

何度か延期された打ち上げに向けて、同期や先輩の仲間たちが歌を作ってくれました。実は創立以来の茗溪教育の柱のひとつに「3 人寄ればハーモニー」というものがあります。嬉しいときや記念になるような大事なとき、節目のときなどには歌を歌おう。みんなで歌える歌を持っておこうというものです。中学 1 年から毎年学年合唱曲を歌い続けていくため、6 年間で学年全員で歌える歌は 10 曲以上になりますし、中学 1・2 年はクラス毎に合唱コンクール、また 3 月の卒業生を送る会（六送会）では全学年、学年合唱を披露します。入学式でも必ず合唱を披露します。（茗溪学園のこの合唱曲編曲集『うたいたいうたをうたいたい』（ドレミ楽譜出版社）は書店でお求めになれます。）仲間の誰かが嬉しいとき悲しいとき、茗溪生は大げさなことはしませんが歌を歌います。

今回の、宇宙への旅立ちに際しては、オリジナル曲『ロボットアームで抱きしめて』。YouTube で視聴できます。作詞は同期で水泳部仲間梅村太郎氏、作曲は同期の塙裕介氏。やはり同期の水泳部仲間でニュースキャスターの大高未貴さんがニュースで紹介したシーンも YouTube でご覧になれます。歌詞がまた茗溪生らしい。「宇宙なんて案外近いものさ。直線 400 キロ、車で 4 時間･･･」のんびりした、気負いの無い優しさにあふれていて、心から仲間の宇宙への旅立ちを優しく見守っている、「よかったなあ、夢が実現して。無事帰ってこいよ。そしてまた飲もうぜ。」という声が聞こえてきそうな歌です。